

親鸞のコスモロジー

菅 野 隆 一

親鸞思想の根底には一つのコスモロジーが伏在していた。

ここにいるコスモロジーとは、宇宙の形態や起源に関する理論の謂ではなく、宇宙を有意味的な秩序空間として捉えることをいう。親鸞には宇宙を宗教的な意味空間として捉える基底的な認識があった。小論は、そうした親鸞のコスモロジーの具体的な内容と意義を明らかにしようとするものである。ただし、考察が広範囲に及ぶのをさけるため、ここではとくに「天体宇宙」の問題に焦点を合わせて論述を進めることにしたいと思う。

『教行証文類』の「化身土文類末」には周知のように『大集経』の引文が延々と続く。親鸞はその引用をとおして天体の問題に言及している。内容を略説すると、「魔王波旬星宿品」の引文では、釈尊の因位とされる佉盧虱吒仙の語として「我もろもろの衆生を安樂ならしむるをもつての故に星宿を布置す」と説いて、星宿配置の目的を明かし、続いてこの星宿の運行と季節の推移に対応のあることを示す。会座の天人

等、この所説を聞いて随喜し、さらに無量世の後にも伽力伽という仙人が出現して、佉盧虱吒仙と同様に「もろもろの星宿、小大月の法、時節要略を説く」ことが告げられる。星宿の配置と運行およびそれに基づく季節の推移はすべて衆生の安穩のためになされたものであり、その所作事業は時効を貫く、とこの一段は主張するのである。

数段後に続く「諸天王護持品」の引文では、星宿のマンダラの布置構造を明かす。すなわち、二十八宿・十二曜・十二宮等の星宿は、無秩序に存在しているのではなく、それぞれ仏意によって、須弥の四州に分布配置されたものであることを、あたかも天球図を描くかのように説き示している。そして、その星宿配置の目的はひとえに人界の「護持養育」にあるとするのである。

親鸞はまた『唯信鈔文意』においても、天体の問題に言及している。

「この無碍光仏は観音とあらはれ、勢至としめす。ある経(『安

案集』所引の疑經『須弥四域經』には、観音を宝応声菩薩となづけて日天子としめす。これは無明の黒闇をはらはしむ。勢至を宝吉祥菩薩となづけて月天子とあらはる。生死の長夜をてらして智慧をひらかしめむとなり」(真聖全Ⅱの六四〇頁)

日月を観音勢至の示現、観音勢至を阿弥陀の示現とする極めてユニークな見方を親鸞はここで呈示している。親鸞にとって、日月は単なる自然界の事物ではなく、深層の意味作用(無明の黒闇をはらい、生死の長夜を照らす)をあらわす象徴的な存在にはかならなかつたのである。

以上、略述したように、親鸞は日月星宿をすべて仏の布置とし、これに人界護持の役割を付与していた。星宿不拜のメッセージはその含意として織り込まれたものであるが、こうした教説の背後には当時の人びとの以下に述べるような宇宙観が介在していた。

古代・中世の人びとにとって、天体は畏怖すべき存在であった。というのも天体は人の世の運命を司り、異変(≡天変)を示して災異の到来を告げると信じられていたからである。当時の史書、日記類を検すると、彗星・客星・惑星どうしの合犯・日食・月食など、天変に関する記事が実に頻々と出て来ることに驚かざるを得ない。人びとはそうした天変を災異の勃発する兆候として甚だ怖れていたのである。以下、親鸞と時代を同じくする『玉葉』『明月記』『吾妻鏡』等の史料

によって、その点を確認しておきたい。

まず貴族の日記から九条兼実の『玉葉』、藤原定家の『明月記』の例を引く。

「主税助時晴来、談天変之間事、去今兩月之間、天変五ヶ度、皆是希代之變異也。就中、太白(金星)入太微之變、總為天下別為大臣之慎也。(中略)末代之變、災殃不廻踵、不可不慎云々」(治承元年七月十二日条 国書刊行会篇『玉葉』第二の八六頁)

「彗星者第一之變也。去年熒惑(火星)入太微、今年彗星見。亂代之至、以之可察云々」(治承二年正月十八日条 同右一三七頁)

「自去比天変頻示、一有天下大事之由、司天(天文博士)頻奏、御祈無隙云々。衆口噉々、閭巷浮説(民衆の風説)、狂亂可恠」(建久七年六月十九日条 国書刊行会篇『明月記』第一の四六頁)

「下人等称二星取合由。望見西天、今日無纖月、太白之傍、東南方歟。一寸許有三星、人云取合之後、離去星也云々。伝聞、二星事太白(金星)歳星(木星)相去三寸迫犯了。占文之趣(陰陽道の占い文)、白衣之会(葬礼)・兵飢之由云々」(天福元年六月二・三日条 同右第三の三六二頁)

『玉葉』『明月記』など、貴族の日記には天変に関する記事が頻出するのがつねである。ここに例示したのはそのごく一部でしかないが、当時の貴族がいかに天変を怖れていたか

を示して余りある。平安京の貴族は些細な天変にも敏感に反応し、物忌みや修法を取り沙汰して、畏怖にみちた生活をおくっていたのである。また、貴族のみならず一般庶民にいたるまでが天変におののいていたことも、右の『明月記』の記載内容から十分察することができる。当時の人びとは階級のいかんを問わず、すべて畏怖の念をもって天体の異変を眺めていたのである。

次に鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』の例を摘示しておこう。

「十三日戊子。晴。自二日至去夜十二日、彗星連夜出見。仍

今晚、百日泰山府君御祭被_レ始_レ行之」（貞応元年八月 国史大系

『吾妻鏡』第三の四頁）

「一日己亥。戌刻、歳星（木星）犯_二辰星（水星）。又熒惑（火

星）入_二太微之由。司天（天文博士）之輩申_レ之。七日乙巳。始_二

行天変御祈等」（貞応二年十一月 同右一三頁）

「十五日辛酉。戌刻、維範朝臣、又参_二六波羅殿、太白（金星）

犯_二昂星、歳星（木星）犯_二鬼星_一由申_レ之。仍為_二將軍御祈被_レ行

属星祭」（嘉禎四年閏二月 同右二二二頁）

「八日癸酉。戌刻、彗星近_二歳星（木星）。今日被_レ始_二行天変御祈

護摩。（中略）十七日壬午。於_二鶴岡宮寺_一令_二百口僧_一、被_レ行_二仁王

百講。將軍家有_二御参。是依_二彗星出現事_一也」（仁治元年正月 同

右二五三—四頁）

『吾妻鏡』の後半部を埋めるのは右のごとき星宿祭祀の記事である。鎌倉幕府は、天変のたびに陰陽師や祈禱僧を動員

して、泰山府君祭・属星祭・曜宿護摩など、幾多の星宿儀礼を営んでいた。その回数と種類の多さは平安の貴族社会のものを凌ぐほどである。天変に対する怖れは、質実剛健を気風とする鎌倉武士といえども例外ではなかったのである。

以上、親鸞とほぼ同時代の史料から天変に関する記事をか拾いあげた。当時は天文史上の特異期でもあったかと思われるほどに天体の異変があい続くが、例示した史料にみられるように、人びとはそれらを神経質なまでに怖れていたのである。中世の人びとにとって天体宇宙は親しむべき空間などではなく、人の世の運命を支配し、災異をもたらす畏怖すべき空間にはかならなかったのである。

親鸞はこのような中世人の宇宙観を根底から覆し、天体をすべて仏の配慮に基づくものとする新たな宇宙観を呈示した。すなわち、コスモロジーの転換。親鸞は、この世の運命を司るとされた天体を阿弥陀仏の布置空間と位置づけることによって、それが畏怖すべき対象でないことを明示し、当時の中世的宇宙観を高度な宗教的宇宙観にまで変成させたのである。

△キーワード▽ 星宿、玉葉、明月記、吾妻鏡

（龍谷大学講師）